

井月さんの帰郷

立ちそこね帰り後れて行乙鳥

新しい明治の時代を迎え（むか）ると、井月さんの身の回りにもいろいろなことが起こってきました。全国いっせいに戸籍調査（こせき）が行われました。徴兵（ちやうへい）や税金制度を確立させようとするもので、井月さんのように戸籍のないものは住みにくくなりました。日本は近代国家の道を歩み始めたのです。

一八七二（明治五）年九月のことです。伊那村大久保（現駒ヶ根市）おおくぼ大きな家を持つ中村家で井月さんの送別会が開かれ、なんと一三人が集まりました。井月さんの俳句仲間、弟子、友人たちです。伊那から故郷の長岡へ井月さんを送ろうとしたのです。長岡から戸籍を持ち帰れば、伊那で





厄介者扱いにされないで暮らせるし、ひよっとした
ら夢である草庵も持てるのです。

伊那の人たちはお金の蓄えもない井月さんのた
めに、書画を持ち寄って餞別のお金を集めようと
したのです。

しかし井月さんは帰りませんでした。長岡へは

帰れなかったのではないで

しょうか。戊辰戦争を戦

わなかった者は藩の裏切

り者、生きるか死ぬかの

苦しい戦いをしていた時

に、伊那でのほんとは俳

句をやっていたなどとい

うことは許されることで

はありませんでした。

井月さんはその後も何

度も故郷に帰ろうとした

ことがあったのですが、

数ヶ月、いや半年もすると、また伊那に戻ってきて
しまうのでした。

立ちそこね帰り後れて行く乙鳥

立ちそこね、帰り遅れて行き、また帰ることを

繰り返すツバメは、井月さんのことです。



晩年の井月さん

翌あすの日を頼むでもなし枯柳かれやなぎ



井月さんが年をとると、家にながらせて酒を出してくれたり、お茶漬ちやつけけや蕎麦そばなどを食べさせてくれる家もだんだん少なくなっていきました。

露つゆの音腹はらもへるがに夜よるの牙さえ

秋の夜半、冷えた草木にできた水滴すいてきの落ちる音がする。お腹なかがすくほどに目が冴さえてきて眠ねむれない井月さんがいます。

朝寒あささむや人の情なさけはわが命

秋の寒い朝だなあ、人の情なさけけに頼たよって命をつないでいるのだなあと思う井月さんです。でも、人の家を訪ねても俳人としての誇ほこりは失いたくない。乞食こじきのように物だけをもらうことはしたくない、せめて一句だけでも置いていきたいと思っている井月さんです。

井月さんの亡くなる四年前、一八八三（明治一六）年のある冬の日の日記には次のようなことを

書いています。

年の暮れもせまったある日こと、西春近の泊とまった家で朝飯にありつけず、朝早くに出立しゅったつしました。寒い日で一面の雪景色。雪道を行くうち下駄げたの



鼻緒はなおが切れてしまいました。這はうように駆け込んだ福島ふくしま(現伊那市)の家の軒先のきさきを借りて直し、歩きやつのこと投じたのです。

主人あるじは、一本の熱燗あつかんの酒を出し、温かい粟粥あわがゆを振ふる舞まって迎むかえてくれたのである。

粟粥でつなぐ命や雪の旅

この家は決して豊かではないけれど、どんな時でも井月さんを温かく受け入れてくれた家でした。

しかし、井月さんは同じ家に長く留まることはしたくない、あまり迷惑めいわくをかけたたくないきづかと氣遣きづかうのでした。井月さんは次の日、また出かけて行きます。

遠近とおいちかのもちつきききくや草まくら

あちこちから正月を迎える餅つきもちつきの音が聞こえ

るのに、野宿をしなければならぬのでしょうか。

井月さんにはそんな日もあったはずですよ。

行先に困り果てたり年の坂

酒蔵に径もなし年の暮

凍った月が井月さんの影を地面に落とし動か

いような、そんなさびしい姿が浮かびます。

しかし、井月さんの日記には次のような句もあります。

翌の日を頼むでもなし枯柳

六三歳、老い先短い枯柳の井月さんです。今まで幸いに自分の信念に従い、無一物を通し、俳句一筋の生涯を送ってきました。もはや何も明日頼むことも思い残すことはない、そんな心境を詠っているのです。少し救われるような気持ちになります。

